

green-eyed はなぜ「嫉妬」するのか

— シェイクスピアの語形成法解明への試み —

三輪 伸春

A Lexicological Inquiry into the Word *green-eyed*: A Consummate Coinage of Shakespeare

MIWA, Nobuharu

Abstract

The adjective *green-eyed*, recorded in *OED*² as first used by Shakespeare, is generally thought to be formed only by native elements. But no one has ever given sufficient explanation of the etymology of the word.

This paper aims to insist, from a philological point of view, that we have to take into consideration an exhaustive knowledge concerning *green-eyed* in order to comprehend the meaning and nature of the word *green-eyed*: the historical knowledge of the Anglo-Saxons, political and social, and the composite interference and intermixture of ancient Germanic tribes.

H. Bradley, one of the four co-editors of *OED*¹, expounded thus: “It would be easy to give a somewhat long list of words, such as *control* (as a noun), *credent*, *dwindle*, (...), which were used by Shakespeare, and have not yet been found in any earlier writer. But such an enumeration would probably give a greatly exaggerated impression of the extent of Shakespeare’s contribution to the vocabulary of English. The literature of his age has not been examined with sufficient minuteness to justify in any instance the assertion that a new word was first brought into literary use by him.” (*The Making of English*, 1904, p.231)

Keywords : green-eyed, Shakespeare, semantic change, word formation, semiology

要旨

本稿は、シェイクスピアを初例として、現代のイギリスの口語では日常によく知られている green-eyed「嫉妬深い」という語を取り上げてその由来と成立を考察する。本来語のように見えるが、外来語に由来する語 wall-eyed にシェイクスピアが green を加えて本来語らしく形成した語である。

語彙史の場合、英語の共時的側面と通時的側面、それに音声、語形、シンタックスという内的側面だけではなく、言語外的側面にも想定している以上に配慮しなければならない。言語の根幹をなす内的側面（ソシュールの「ラング」、サビアの「バタン」、記号論の「コード」）ばかりではなく、言語が生きて使われる側面（ソシュールの「パロール」、サビアの「スピーチ (speech)」、記号論の「メッセージ」）への考慮が不可欠である。

新しく形成された語やもたらされた外来語は1語1語が英語の音声と形態という言語内的規則の干渉を受ける。そして、英語に取り入れられるか否かが決められる。さらに、歴史、文化、思想といった言語外的な人文科学のほとんどの分野の見地から英語の語彙として必要であると認められて

はじめて英語に受け入れられる。

特にシェイクスピアは、いわゆる学者ではないが英語の言語的特性を熟知していたこと、英語国民の歴史、文化、民族性にも通暁していたこと、芸術的才能に恵まれていたこと、語感に優れ、一般民衆により実際に生きて使われていた口語、方言の動的傾向を敏感に感じ取ることができる学匠詩人であった。そのために言語に関する思想家ともいえるシェイクスピアの造語した、あるいは導入した語は深遠な意味を持つことがある。green-eyedはその典型的な例である。その由来と成立を解明するためには徹底した文献学的な考察を必要とする。

キーワード：green-eyed, シェイクスピア, 意味変化, 語形成法, 記号学

目次

1. はじめに
- 第1章 「嫉妬」を意味する green-eyed
 - §1. シェイクスピアの新造語 green-eyed
 - §2. 辞書にみられる green-eyed
- 第2章 green-eyed と「猫」—要因その1—
 - §1. 「猫」と「嫉妬」
 - §2. 現代英語における green-eyed
 - §3. 方言における green-eyed
- 第3章 green と同義語反復構文—要因その2—
 - §1. green の意味変化
 - §2. シュミットと green の同義語反復構文
 - §3. OED² 3.a green の記述と green の同義語反復構文
 - §4. シェイクスピアの green の同義語反復構文の実例
- 第4章 grey-eyed, whall eyes, wall eyes から green-eye へ—要因その3—
 - §1. grey-eyed
 - §2. wall-eyes, whally-eyes—ネアズ (R. Nares, 1882) の記述—
 - §3. whally-eyes から green-eyed へ— (W. W. Skeat) の記述—
- 第5章 結論 シェイクスピアにみる究極の語形成法

1. はじめに

本稿は、現代のイギリスの口語では日常的によく知られている green-eyed という語を取り上げてその由来と成立を考察する。シェイクスピアの語、意味の研究にはことのほか広範囲にわたる様々な知見が不可欠であることを証明する試みである。

green-eyed はシェイクスピアを初例とする。本来語のように見えるが、外来語に由来する語 eye にシェイクスピアが green を加えて本来語らしく造語した語である。英語史における語形

成法に関して、green-eyed の語源と由来を教えてくれる興味ある問題を取り上げる。

現代の意味変化、語彙史の研究は、とかく専門的な英語学・言語学の限られた数の文献、辞書、注釈の範囲内での考察がなされているように思われる。意味、語彙の分野は研究対象が幅広く理論化が難しいために、理論優先の現代言語学ではなおざりにされているようである。

語彙論、意味論の場合、共時的側面と通時的側面というまでもなく、言語の音声、語形、シタックスという内的側面だけではなく、言語の外的側面にも想定している以上に配慮しなければならない¹。音声、形態、シタックスといった内的側面（ソシュールの「ラング」、サピアの「パタン」、記号論の「コード」）ばかりではなく、言語が生きて使われる側面（ソシュールの「パロール」、サピアの「スピーチ (speech)」、記号論の「メッセージ」）への考慮が不可欠である。

英語の歴史における借用語研究は、外来語というのは借用されるのが当然という前提で考えられているようである。しかし、実は、新しく誕生しようとしている語やもたらされた外来語は1語1語が英語の音声と形態の規則の干渉を受ける。そして、英語に取り入れられるか否かが決められる。言語の内的問題はいうまでもなく、言語外的な、歴史、文化、思想など人文科学のほとんどの分野が関わる複雑な問題なのである。

さらには、特にシェイクスピアの場合、語感に優れ、直感的に英語の内的側面を熟知していたこと、英語国民の歴史、文化にも通暁していたこと、詩的才能に恵まれ、一般民衆が実際に使っていた生きた英語の動的傾向を敏感に感じ取り、新しい時代にふさわしい英語の誕生と発展に大きな貢献をしたという点も忘れてはならない。

第1章 「嫉妬」を意味する green-eyed

§1. シェイクスピアの新造語 green-eyed

green-eyed はシェイクスピアを初出とし『ベニスの商人 (*The Merchant of Venice*)』と『オセロ (*Othello*)』で計2回用いられている。

- (1) *Por.* How all the other passions fleet to air,
As doubtful thoughts, and rash-embrace'd despair,
And shudd'ring fear, and green-eyed jealousy!

(*The Merchant of Venice*, III. ii. 107-11, *The Riverside Shakespeare*)

(ポーシア：ああ、他の感情はみんな飛び去ってゆく——
気がかりだった心配も、あわてて持っていた絶望も、
身をふるわすような不安も、緑の目をした嫉妬も!)

1 本稿末尾のサピア (1904) からの引用参照 (p.36)。

(2) *Iago*. O, beware, my lord, of jealousy!

It is the green-ey'd monster which doth mock

The meat it feeds on.

(*Othello*, III. iii. 165-68, The Riverside Shakespeare)

(イアゴー：閣下、嫉妬は恐ろしゅうございますよ。

こいつはいやな色の目をした怪物で、人の心を食い物にして、

しかも食う前にさんざん楽しむというやつです。) (以上の下線、筆者)

引用 (2) の green-eyed jealousy に関して、英語史に関して詳しい市河三喜・嶺卓二「詳註シェイクスピア叢書」の *The Merchant of Venice* は次のように注釈している。

(3) 嫉妬の眼を 'green eye' という。Cf. *Othello*, III. iii. 165-6: Oh, beware, my lord, of jealousy,

It is the *green-eyed* monster.

(*The Merchant of Venice*, 3.02. 110, 研究社, 1967, p.173)

green eye が「嫉妬」を表すとはされているが、その由来については述べていない。

「大修館シェイクスピア双書1」の *The Merchant of Venice* は次のように注釈している。

(4) 'of a morbid sight, seeing all things discoloured and disfigured' (Schmidt) 『オセロー』

3.3.160-70 に 'O, beware my lord, of jealousy; It is the green-ey'd monster...' とあるように、

嫉妬の形容によく使われる。

(*The Merchant of Venice*, 大修館書店, 1996, p.137)

「green-eyed は嫉妬を形容するものとしてよく使用される。」とあるが、その由来については記述されていない。

green-eyed について、どの注釈本も green-eyed が「嫉妬」を表すということ、green-eyed が実際に使われている *The Merchant of Venice* と *Othello* の該当箇所である引用 (1), (2) には言及しているが、green-eyed が「嫉妬深い」という意味になる理由についての具体的な言及はまったくない。どの注釈書も green-eyed の由来についてはわかっていないようである。

そこでまず、green-eyed が「嫉妬深い」を意味する理由をさまざまな辞書類を参照して考察する。

§2. 辞書にみられる green-eyed

引用 (1), (2) に現れる green-eyed, green-ey'd はいささか奇異な印象を受ける。green-eyed 「緑の目をした」がなぜ jealousy 「嫉妬」を形容するのか²。

2 green+eye+-ed (= 形容詞+名詞+接尾辞 -ed 「緑色の+目を+持った」) という語形そのものは英語の語形成法に適合しており問題ない。例。kind-hearted 「優しい心を持った」, double-bedded 「ダブルベッドを備えた」。

シュミット (A. Schmidt) の *Shakespeare Lexicon* には、

- (5) **Green-eyed**, of a morbid sight, seeing all things discoloured and disfigured: g. [=green-eyed] *jealousy*, *Merch.* III, 2, 110. *Oth.* III, 3, 166 (cf. *Green* adj.2) (...)

(A. Schmidt, *Shakespeare Lexicon*, green-eyed)

とあるが、なぜ green-eyed が jealousy と関係するのかまったく説明されておらず、問題の解決にはならない。green-eyed の定義と引用文とがうまくかみあっていない³。green-eyed の意味は「目を病んでいる、色が変わって見える」とあるが、引用文の green-eyed jealousy は目の病気を意味しているのではなく、「緑色の目をした嫉妬」を意味しており、語義の説明と適合していない。

*Noah Webster's An American Dictionary of the English Language*¹ にある green-eyed の項。

- (6) **Green-eyed**, Having green eyes ; as *green-eyed* jealousy.

(*N. Webster's an American dictionary of the English language, 1st edition, 1800*)

green-eyed を “having green eyes”, としているが、「緑色の目」であれば定義と引用文の意味とが対応していない。「嫉妬に狂った目」を意味するというのであれば、green がなぜ「嫉妬深い」という意味になるのか説明が必要である。いずれにしても説明不足である。

*OED*² の green-eyed の項 (発音省略。引用文は著者と年号のみ)。

- (7) **Green-eyed**, [f. *a.* + -EYE² n. + -ED²; cf. EYED 1b.]

Having green eyes, **the green-eyed monster** (in and after Shakespeare):

jealousy. (Cf. *GREEN* *a.* 3.) Hence *fig.* Viewing everything with jealousy.

1596 SHAKES. *Merch.* V. III, ii. 110 Shuddring feare, and greene-eyed ielousie. **1604** *Oth.* III. iii. 166 Oh, beware, my lord, of iealousy, It is the green-ey'd Monster. **1627** MILTON (...) **1653** R. SANDERS (...) **c 1800** H.K. WHITE (...) **1804** *Sporting Mag.* (...) **1854** S. DOBELL (...) **1883** M.E. BRADDON (...)

(*OED*², green-eyed)

「緑色の目を持つ」, 「the green-eyed monster = jealousy (シェイクスピアが初出で、それ以降使われるようになった)」, このことから比喩的に「何ごととも嫉妬の目で見ると」という意味の展開の説明とシェイクスピア以降の引用例はあるが、green-eyed という表現そのものの由来については説明がない。

3 シュミットには定義と引用文とが適合していない場合がままある。cf. 三輪「auburn - シェイクスピアの色彩語」2015。シュミットの不備については夏目漱石の「クレイグ先生」参照。

イギリスの *OED*² もアメリカの *Webster*¹ のどちらも詳しく説明していない。そこで、いろいろな辞書の green-eyed の項目、もしくは green の「嫉妬深い」という意味に関係があると考えられる箇所をひとつずつ検討して、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味になるのかを検証する。

『ジーニアス英和大辞典』の green-eyed の項。

- (8) 1 緑色の目をした 2 嫉妬深い || It (=jealousy) is the ~monster which doth mock The meat it feeds on. (*Oth.* III. iii) 嫉妬は緑色の目をした怪物で、餌食として人の心をもてあそぶ。

(『ジーニアス英和大辞典』2001, green-eyed)

『研究社新英和大辞典』の green-eyed の項。

- (9) *adj.* 1 緑色の目をした . 2 嫉妬深い, 憎気深い (jealous) ★ 次の Shakespeare の句から言う : ~jealousy (*Merch. V* 3.2.110) / the ~ monster 嫉妬, 憎気 (*Othello* 3.3.166).
【1596-97】

(『研究社新英和大辞典』2002, green-eyed)

green-eyed は「嫉妬深い」という意味を表し、シェイクスピアの表現に由来する、という。しかし、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味なるのか言及していない。

ジョンソン (Samuel Johnson) の *A Dictionary of the English Language* (1755) の green-eyed の項。

- (10) *adj.* [*green and eye.*] Having eyes clouded with green.

Doubtful thoughts, and rash-embrac'd despair,
And shuddring fear, *greeney'd* jealousy. *Shakespeare.*

(*A Dictionary of the English Language*, green-eyed, 1755, rpt. 1990)

green-eyed の意味は「緑色の目をした」とあり、引用もシェイクスピアの green-eyed jealousy がある。しかし、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味なるのか説明がない。

アニアズ (C.T. Onions) の *A Shakespeare Glossary* の green-eyed の項。

- (11) Jealous OTH 3.3.166 *the green-ey'd monster*, MV 3.2.110.

(Onions, *A Shakespeare Glossary*, 1911, enlarged and revised by R.D. Eagleson, 1986²)

green-eyed は「嫉妬深い」とある。しかし、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味なるのか触れていない。

Webster's New World Dictionary の green-eyed の項。

(12) green-eyed [see Othello III. iii] very jealous

(Webster's New World Dictionary, green-eyed, 1993)

green-eyed は「とても嫉妬深い」という意味で、その代表的な例が『オセロ』の3幕3場での使用である。しかし、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味になるのかは言及していない。

ここまで、シェイクスピアの green-eyed についてさまざまな辞書や注釈書を見てきた。どの辞書、注釈書にも共通していることは、green-eyed の意味は「嫉妬 (jealousy)」である。しかしながら、なぜ green-eyed が「嫉妬」を意味するのかについてはほどの辞書も明らかにしていない。

第2章 green-eyed と「猫」—要因その1—

§1. 「猫」と「嫉妬」

前の章においてさまざまな参考文献の green-eyed の項を検索し、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味になるのかという記述を求めたが、どの辞書も具体的なことは何も言及していない。そこで、注釈書、辞書の類いから視野を広げて、幅広く文献を調査してみる。

現代英語では green-eyed は「猫」について用いられることが多いようなので猫との関係について調べてみる。

『英文学に現れた色彩』は green-eyed について以下のように述べている。

(13) green-eyed は猫の目に由来するもので、昔は青ざめた顔色 (greenish complexion) は「嫉妬」の現われと考えられた。シェイクスピアには green-eyed jealousy (*Merch. V. III. ii.*) という使い方もある。

(遠藤敏雄『英文学に現れた色彩』1971, pp.52-4)

green-eyed が猫の目に由来すると述べられているので green-eyed の「嫉妬深い」という意味がネコ科の動物の目に由来するという記述を検討する。

井上義昌編『英米風物資料辞典』と赤祖父哲二編『英語イメージ辞典』の「cat」の項。

(14) Cat (...) dog と反対にねこはあまり人気がない。というのは西洋ではねこ、特に黒ねこは悪魔の化身のように思われているからである。英国では黒ねこが道を横切ると一時交通が止まるくらいである。

(井上義昌編『英米風物資料辞典』1971, cat)

犬に比べて、猫は不人気である。

- (15) Cat 《俗》性悪女。catty, cattish 猫のような、抜け目のない、意地悪い；grin like the Cheshire cat 無気味な笑い（キャロル『不思議の国のアリス』）⁴
（赤祖父哲二編『英語イメージ辞典』1986, cat）

(14), (15) によると猫は犬よりもよい動物であると思われておらず、その印象は概して好ましくない。

同じく、猫のイメージに関して *Dictionary of Symbols and Imagery* の cat の項。

- (16) **Cat 2** 悪い意味 a 性的に興奮し、肉欲的で、求愛の仕方が獐猛である。また肉欲のためにその優雅さを利用することから、女性的なコケトリを意味する。エリザベス朝では、ニオイネコは肉欲の象徴だった。ネコは性交するとき雄は立ち、雌はその下に寝る。

(*Dictionary of Symbols and Imagery*, 大修館書店, 1984, cat)

性的なことについて述べられるネコは悪い印象をもたれている。

『ブルーワー英語故事成語大辞典』の cat の項。

- (17) (...) cat はまた、意地悪女をさす語であり、“a catty” remark は「悪意のある」意見という意味である。それから cat はかつていかがわしい女をさす俗語であった。
（E.C. ブルーワー著『ブルーワー英語故事成語大辞典』1994, cat, p.308）

cat は「意地悪女」という意味もあり、かつては「いかがわしい女」という意味も表わした。つまり、cat は好ましい意味では使用されない。どの参考書より具体的な記述がブルーワーの green-eyed monster の項にある。

- (18) **The green-eyed monster** 緑の目をした怪物。シェイクスピア SHAKESPEARE は嫉妬をそう呼んでいる。

Iago: O! beware my lord, of jealousy;

It is the green-ey'd monster which doth mock

The meat it feeds on. (*Othello* 3,3, 165-68, 引用3に同じ)

（緑がかかった顔色は、かつて嫉妬を表すものであると信じられていた。緑色の目をしたネコ科動物がみな「餌食の肉をもてあそぶ」ように、嫉妬もまた愛しつつ憎むことで相手をなぶるものである⁵。

（『ブルーワー英語故事成語大辞典』, green-eyed monster, p.778）

4 Cheshire cat の「無気味な笑い（キャロル『不思議の国のアリス』）」については p.12 参照。

5 和訳文中の「餌食の肉」は「餌食」であって、「肉」は不要。シェイクスピア時代の meat は普通「食べ物一般」を意味し、「肉」は意味しない。meat の古い「食べ物一般」という意味は現代英語の meat and drink 「飲食物」、sweetmeat 「砂糖菓子」に残っている。

green-eyed の「嫉妬深い」という意味は緑色の目をしたネコ科の動物に由来する。「嫉妬」とは、自分が愛する人を愛すると同時に憎み苦しめる行為である。この「嫉妬」に類似するのがネコ科の動物の餌食に対する態度である。猫はネズミなど好物である餌食を好むと同時にもてあそび、いたぶるのである。人間の「嫉妬」と同じ行動をとる猫の特徴はその green eyes「緑色の目」であった。よって、green-eyed は「嫉妬深い」という意味になる。

しかし、green-eyed の「嫉妬深い」という意味は「緑色」の目とはまったく関係がないように思われる。手元にある限りの注釈書や辞書も green-eyed が「嫉妬深い」という意味を表すということには言及するものの、なぜ green-eyed が「嫉妬深い」という意味になるのかということまでは言及していない。

「猫」という動物についていっそう詳しく説明しているのがゴールドスミス (O. Goldsmith) の『動物誌 (An History of the Earth and Animated Nature)』(1774) である。

(19) 1 猫

(...) この残忍で癡猛な種族【猫の種族】は、すべて独りで食を求める。そして特定の季【交尾の季】以外は、同族同士でさえ敵なのである。(...)

彼らはみなおしなべて癡猛で、捕食性で、ずるがしこく、残忍で、仲間同士のつきあいには不向きだし、人間の幸福を向上させることもできない。(...)

猫はただ愛情の見せかけを示すだけだ。(...) 愛情の表現が本物である犬とはちがって、猫は人を喜ばせるより自分の楽しみを得ることに熱心で、しばしばただ、それにつけこむだけの目的で人の信用を手に入れる。(...)

仔猫はじつによくじゃれておもしろい。しかし彼らの遊びはじきに悪意に変わってゆく。そして、たいそう早いころから残忍さの素質を見せる。(...)

(...) 猫がその生来の悪意を露呈してしまう特徴は数かずあるが、とらえた小さな獲物を即座に殺さず、面白半分にもてあそぶのは、その中でも最も悪名高きものである。(...)

(『動物誌』1774, 第2巻「四足獣」, 玉井東助編訳, 原書房, 1994, pp.29-36)

ゴールドスミスによると、猫は人間のペットとして人々には扱われているが、内心では自分のことしか考えておらず、非常に自分勝手な生き物である。また、獲物を捕らえた際、時間をかけてもてあそびながらその命を奪うという非常に残虐な一面も持っている。これらのことから、猫は、人間にとってもっとも身近な愛玩動物でありながら、実は、猫は本来自分勝手に残忍な性格の動物である。

時代はシェイクスピアより少し後になるが、猫に関する当時の人々が共通に持っていた印象を理解するために『大英百科事典 (Encyclopædia Britannica)』の初版 (1771) の cat の項から、猫の性格に関する部分 (全体の4分の1) を引用する⁶。

6 *Encyclopædia Britannica* (1771) とゴールドスミスの『動物誌』(1774) とは内容がよく似ている。ゴールドスミスが *Britannica* を借用したのであろう。特に、「ギリシャ人修道士たちがキプロス島の毒蛇を退治するた

- (20) 7. The CAT, (...) the character of the cat is the most equivocal and suspicious. (...) Although cats, when young, are playful and gay, they possess at the same time an innate malice and perverse disposition, which increases as they grow up, (...) Constantly bent upon theft and rapine, though in a domestic state, they are full of cunning and dissimulation; they conceal all their designs; seize every opportunity of doing mischief, and they fly from punishment. They easily take on the habits of society, but never its manners: for they have only the appearance of friendship and attachment. (...) In a word, the cat is totally destitute of friendship; he thinks and acts for himself alone. (...) The female is more ardent than the male, she not only invites, but searches after and calls upon him to satisfy the fury of her desires; and, if the male disdains or flies from her she pursues, bites, and in a manner compels him. (...) But, it is worth notice, that these careful and tender mothers sometimes become unnaturally cruel, and devour their own offspring. (...)

(*Encyclopædia Britannica; or a dictionary of arts and sciences*, 1771, vol. II, p.586, S. Bell and C. MacFarquhar)

【大意】第一に、猫は他の動物に比べてもっとも素性^{すじょう}の知れないものである。子猫の時には、じゃれてむじゃきな印象を与えるが、生まれつき備えている悪意とよこしまな気質を成長するにつれてあらわにする。家庭内で飼い慣らされた生活をしながら絶えず盗みと略奪をもっぱらにし、猫かぶり^たと悪がしこさに長け、しかも、邪悪な下心を徹底して隠し通す。相手に迷惑をかける機会を見逃さない上に、こらしめられるようなへまはしない。世間のきまりごとは取り込むが作法を守ろうとはしない。うわべだけは親密さと愛着を示す。一言で言えば、猫には恩愛の気持ちがまったく欠如している。雌^{めす}は雄^{おす}よりも激越である。自分のたくらみに、雄を巻き込んだりする。万一、雄が雌の求めを軽んじたり、疎んじると噛みつき、無理にでもいうことをきかせる。しかも、わが子には手厚くやさしい雌猫であるが、時として理不尽に残虐になり自らのこどもをむさぼり食ってしまうことがある。

現代のほとんどの注釈書、辞書の green-eyed についての説明が曖昧な中で、当時の人々が共通に抱いていた猫の性格について、*Encyclopædia Britannica* (1771) とゴールドスミスの『動物誌』(1774) がはっきりとその理由を述べている。すなわち、green-eyed の「嫉妬深い」という意味は緑色の目をしたネコ科の動物に由来する。ネコ科の動物は自分の餌食となる小動物を弄びながら弱らせ、ついには殺して食べてしまうという習性がある。人間の嫉妬とは、相手を愛しつつも憎んで苦しめてしまうことである。猫も、好物である小動物(ネズミ)をもてあそび、苦しめてから死に至らしめて、それからおもむろに食することに快感を覚えるという点において人間の嫉妬と猫の食餌法は共通するところがある。

めに猫に訓練を施したが、猫は訓練されなくても生来、餌となる小動物を捕獲する」という記述はそっくりそのままである。先行文献を借用することは、当時も現在もよくあることである。

シェイクスピアが、このような猫の残忍な行為と嫉妬にかられた人間が犯しがちな行動との間には共通するところがあることを十分認識していたことは『ルークリースの凌辱 (*The Rape of Lucrece*, 1608-9)』の次の一節からわかる。

(21) Yet, foul night-waking cat, he doth but dally,

While in his hold-fast foot the weak mouse panteth:

(*The Rape of Lucrece*, 554-5)

しかし、彼はただ、夜中にうろつき歩く猫のように、^{もてあそ}ぶだけだ。

しかと捕らえたまま放さぬ足の下で、弱いネズミはあえぎ苦しむ。

このことから、ネコ科の動物の green eye 「緑色の目」が green-eyed 「嫉妬深い」として用いられるようになったのである。また、参考文献を見ると西洋では「悪魔の化身」とされるときにも、ネコ科の動物が獲物をすぐに仕留めずに、もてあそび、徐々に弱らせる行為は「悪名高いおこない」とされるなど、総合的に猫の印象は好ましくない。さらに、母猫は敵に対しては仔猫を守ろうとするが、自分の産んだ子供を食べてしまうことすらある。猫が、家庭にあって愛玩動物として広く飼いならされている一方、その内面に非常に残酷な性質を秘めていることも暗黙のうちに人々によく知られている事実である。猫科の動物、特に猫が、その中でもメスが、生まれつき備えているこういう残酷な性質が、敵、あるいは時として友人、味方をもあざむき、裏切って意に介さないような人間、あるいはそういう人間の持つ嫉妬心にたとえて、「みどり色の目をした猫 (green-eyed cat)」が「嫉妬」を意味するために用いられるのである。

猫の性格に関する (13) から (21) までの文献、特に *Encyclopædia Britannica* とゴールドスマスに詳しく述べられている猫の残酷な性格が古今東西の人々の心に焼きついているとすれば猫の性格が人間の「嫉妬心」と強く結びついていることは容易に察しがつく。green-eyed が「嫉妬」へと意味が発展する第1の要因である。

§2. 現代英語における green-eyed

green-eyed はシェイクスピアを初例とし、シェイクスピアの用いた語の中でもとりわけ特殊な用法であると思われるが、「嫉妬深い」という意味を持ち、現代の口語英語の日常会話における基本語として定着しており広く使われている。

文学作品とは別に、一般庶民の日常的な口語に身近な表現として違和感なく用いられていることも無視できない。このことは、*OED*² の green-eyed の項にある 1800 年以降の引用例が文学的な作品に加えて庶民的な口語体であることからもうかがわれる⁷。

現代の庶民的な口語体の英語に、green-eyed が用いられている身近な例が『イソップ物語 (*Aesop's Fables*)』の一話である「ネズミの会議 (*The Committee of Mice*)」に見られる。粉ひき小屋に住むネズミたちが、ネズミの被害に困った粉屋が連れてきた猫に多くの仲間を殺されて猫対策の会議を開き、猫の首に鈴を付けるという案が出されたが、誰も猫の首に鈴を付けよう

7 1800年以前の庶民の口語体の用例が *OED*² に記録されることはあまりない。

としないのでせつかくの名案も絵に描いた餅に終わったという誰もが知っている話である。
green-eyed, green eyes を含む文は以下の3例である。

(22-a) Out of the bag he pulled a very large green-eyed cat!

(22-b) Wherever they tried to hide, at least five or six mice were caught by the quiet, green-eyed cat.

(22-c) The mice only knew she had arrived when they saw her big, shining, green eyes.

(*Aesop's Fables*, IBC パブリッシング 2008, pp.35-40, 下線, 筆者)

この物語は古代ギリシャの寓話作家イソップ (*Aesop*) の原作である『イソップ物語 (*Aesop's Fables*)』のひとつであり、内容は誰もがよく知っている話である。基本 1000 語以内で書かれ、新書版全 6 頁、1045 字しかないにもかかわらず、green-eyed を 2 回、green eye を 1 回、計 3 回も猫の目を修飾するために使用している。すなわち、イギリスでは green-eyed, green eye は「残虐な猫の目」を象徴する語として根づいている。この場合、green-eyed, green eye は「嫉妬」とは関係なく単に猫の残忍な性格を描写するために用いられている。また、手元の『イソップ物語』のギリシャ語原典からの直訳、とフランス語訳には green-eyed cat に該当する表現は出てこないで近代イギリスのシェイクスピアを初例とする表現である。

人々がネコ科の動物に対して持っているこのような好ましくない印象が green-eyed, green eye という表現として定着していることは、人口に膾炙した *Aesop's Fables* の *The Committee of Mice* において猫を表す形容詞として繰り返し用いられていることから明らかである。しかも、基本 1000 語で語られる英語教育の初学者向け教材である。そして、口語に広く用いられていたと思われる green-eyed, green eye が文語に頻繁に現れるようになるには 1800 年以降である。つまり、シェイクスピアの影響が文献に現れ始めた頃の作品に多くなる。同時に、*OED*² に引用されている 1800 年以降の文献は、広く庶民の目の届く、雑誌、新聞、大衆小説という傾向がある⁸。

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議な国のアリス (*Alice's Adventures in Wonderland*)』(1865) の映画 (*Alice in Wonderland*, 1951, Walt Disney) を観ると、アリスがネズミ穴に落ちる前の導入部に「緑色の目」をしたアリスの飼い猫ダイナが登場する。この猫は、ネズミ穴に落ちたアリスが出くわす地上の世界とはすべてがあべこべの不可思議な冒険を予感させる役割を果たしている。ダイナは⁹、嫉妬とは関係がなく、地下世界でのアリスの不可思議な冒険を暗

8 シェイクスピアは同じ語を多用することがなかった。たとえば、シェイクスピアが造語した転換動詞106語のうち、1回きりが74語 (70%)、2回が18語 (17%) にすぎない。green-eyed は2回だけである。シェイクスピアが用いた表現は、口語、方言で後世広く活用され、作家は文学作品に利用した。現代作家の例。Uncle Jo is chronically glum and ill-tempered these days. I suspect the green-eyed monster; for the blue eyed monster (in other word, Miss Maunciple) has been rolling them in the direction of young Pete. A. Huxley, *After Many a Summer* (1939), II, i. (市河三喜・嶺卓二注釈, *Othello*, p.212)。三輪『シェイクスピアの文法と語彙』第12章 p.318

9 この猫は、ストーリーの中では緑色の目をしているが、映画のスタッフ一覧の画面の背景では白い目をしている。ウサギを追いかけるアリスを追ってウサギ穴に入り、アリスが深い縦穴に落下するところまで行く場面では目は薄い水色で白に近くなっている。アリスの目のほうが青い。目の色はあまり問題になっていないようである。言い換えれば、「緑」の幅が広く、白色から黄色、みどり、褐色までを意味しているようである。したがって、みる人によっては色の識別がかなり違う結果になっている。あるいは、新天地アメリカ合衆国では「みどり」の意味が忘れられているのだろうか。

示するだけのようである。穴の中で、物語の中段と終盤でチェシャー猫 (Cheshire cat) が突然登場する。しかし、このチェシャー猫の目は¹⁰ 緑色ではない。映画で見るとはっきりとした黄色である。green にかなりの幅があることを意味している。しかし、キャロルのこの作品から、「緑の目をした猫」が妖しげな雰囲気作りに欠かせない要素であることが英語の口語、方言で広く認識されていることがわかる。

本節で述べてきたことから、green-eyed が猫の残虐な性質と深く関連することが明らかになった。「嫉妬」への意味の発展の第1の要因である。

§3. 方言における green-eyed

シェイクスピアは、方言にみられる語、用法、意味にも敏感で、自分の作品に巧みに取り入れている¹¹。シェイクスピアの出身であるウオリックシャーの隣のウスターシャーの方言に関してノーサル (G.F. Northall) の『ウスターシャー南東部語彙集 (*A glossary of words and phrases used in S.E. Worcestershire*, 1894-6, English, Dialect Society)』には wall-eyed という項目があり、次のような記述がある。(*A glossary of words and phrases used in S.E. Worcestershire, together with some of the sayings, customs, superstitions, charms, &c. common in that district*, [http://archive.org/stream/glossaryofwordsp30sailuoft/...](http://archive.org/stream/glossaryofwordsp30sailuoft/))

- (23) Wall-eyed [waul-id', waul' -id], adj. Having an eye, the iris of which is streaked, part-coloured, or lighter in hue than the other. Although the eye is somewhat stony in appearance, vision is not affected, it is said; but animals exhibiting this peculiarity are believed to be treacherous and unreliable. In persons, 'wall-eyed' is more particularly applied to those who show an undue proportion of the white of the eye, the iris being much turned towards the outer corner of the socket.

Shakespeare's use of this word is somewhat ambiguous; but I am of the opinion that he meant to convey a sense of 'treacherous' or 'evil,' in addition to that of remarkable expression or aspect.

(G.F. Northall, *A glossary of words and phrases used in S.E. Worcestershire*, 1894-6, English Dialect Society)

この引用中、眼病の症状についての記述に加えて、注目すべきは、「wall-eyed をした動物と人の性格」についての記述である。wall-eyed をした動物は「飼っている人間の信頼を裏切る、信頼がおけない (treacherous and unreliable)」と記されている。そして、人間について用いたシェ

10 胴体の縞模様は glaucoma の streaks を暗示するのであろうか。「みどりの目をしたチェシャー猫」というのは、古来より「不吉な印象の目」を暗示する「みどり色」に加えて、イギリス中部から北部地方では、異民族のケルト人の領域に接している「チェシャー州」で「不可解な」という印象を強めた。

11 たとえば、シェイクスピアは、自らの出身地のウオリックシャー方言に特有の形容詞の「二詞一意 (hendiadys)」を名詞にも拡大使用して取り入れている。三輪「シェイクスピアの hendiadys」『英語の語彙史』第12章。

イクスピアの意図した意味は、曖昧な点があるが、やはり「信頼を裏切る、あるいは悪意のある ‘treacherous’ or ‘evil’」である。ノーサルは、シェイクスピアの『ジョン王』と『タイタス・アンドロニカス』とスペンサーの『妖精の女王』（本稿の引用 (36)）、その他からの3例を引いている。スペンサーとシェイクスピアの意味用法が方言と共通するという見解である。このことは、ノーサルが、ウスターシャー方言の意味用法がロンドンの人々に理解されている事実を証明していることになる。シェイクスピアもスペンサーも、そしてシェイクスピアの劇を観た人々もスペンサーの詩を読んだ人々も wall-eyed という語が、イギリスの歴史、文化、言い伝えを含意している語であることを知っていたことがうかがわれる。ノーサルの語彙集が出版された19世紀末はまだ共通語の影響が現代ほど地方に浸透していない時代なので、wall-eyed は、シェイクスピアの時代と同じようにウスターシャー南東部の方言で生きて使われていたと考えられる。また、シェイクスピアもスペンサーも方言にみられる、言葉の生きた意味用法にも注意を怠らず、歴史と伝統を伝える表現を自分の作品に取り入れた。ウスターシャー方言の wall-eyed も green-eyed 誕生への布石のひとつである。(第4章で詳述)

第3章 green と同義語反復構文 (repetitive word pairs)¹²—要因その2—

前章までの考察から当然の帰結として誰もが抱く、肝心かなめの問題は green-eyed が green + eyed でなぜ「嫉妬」を修飾するのかということである。どの辞書や注釈書を見ても green-eyed が「嫉妬」を修飾することには言及しているものの、なぜ green-eyed という語形が「嫉妬」という意味に関連するのかということまでは触れていない。すなわち、なぜ green なのか、である。

§1. green の意味変化

ここで、green の意味変化の概要を把握しておく必要がある。

green は遠く印欧祖語に端を発する。OED²によると、英語史にはいつてからの green は、初例が英語の最初期である700年に始まり、発生したすべての意味が廃用とならずに現代まで生き残っている。また、意味の幅が色彩語としての「緑色」から「嫉妬深い」というかけ離れた意味まで、その幅広い意味領域を持っていることから、green は古期英語から現代英語に至るまでにさまざまな意味変化を遂げている。ここで、green が歴史的にどのような意味変化を遂げてきたのかをわかりやすくするために、まず、OED²に記載された green が持つそれぞれの意味の初出年と最後に使用された年を示し、次にそれぞれの意味の推移を図で表す。

(24) green の意味別発達

1. (黄色と青の中間の色) 緑の (a 700 ~ 1867)
2. 青草、葉に覆われた (847 ~ 1968)

12 double expression, synonymy (Jespersen), doublet (N.F. Blake) ともいう。

3. (病気, 気分, 不機嫌, 恐怖, 嫉妬で) 顔色が青ざめた (1300 ~ 1887)
4. 緑の草, 植物, 野菜から成る (1460 ~ 1879)
5. 果物や植物に用いられて (a) 熟していない, (b) 未熟な,
(c) 生命力に満ちた, (d) みずみずしい (c 1000 ~ 1884)
6. 活力に満ちた (c 950 ~ 1824)
- †7. 若年の (1412-20 ~ 1818)
8. 未熟な, 経験不足の (c 1300 ~ 1876)
9. 未乾燥で準備ができていない (1477 ~ 1881)
10. 生々しい, 新しい (1297 ~ 1878)

(25) green の意味変化の図

	700-1000	1100	1200	1300	1400	1500	16000	1700	1800
1. as the colour	700								1867
2. in leaf	847								1968
3. having a pale, sickly				1300					1887
4. consisting of green herbs					1460				1879
5. unripe	1000								1884
6. full of vitality	950								1824
†7. youthful						1412-20			1818
8. immature				1300					1876
9. not ready for use						1477			1881
10. fresh, new				1297					1878

green の意味を, (A) 全体に共通する「中立的意味」, (A) から派生した, 相反するふたつの意味 (B) 「好ましい意味」, と (C) 「好ましくない意味」の3つに分類して表にまとめると以下のようなになる。

(26) 意味の分類表

基本的, 中立的意味 (1, 2, 4)	基本的, 中立的意味 (1, 2, 4)
	↳ 好ましくない意味 (3, 5, 8, 9)
	↳ 好ましい意味 (6, 7, 10)

OED による green の意味変化の概要には以下の特徴がある。第一に, 初例が700年に始まり, ほとんどの意味は現代まで生き残っている。第二に, 意味の幅が色彩語としての「緑色」から「嫉妬深い」というかけ離れた意味, あるいは「未熟な」から「生命力に満ちた」という, 相反する意味まで非常に幅広い意味領域を持っている。第三に, 「基本的意味」であり, かつ「中立的意味」である 1, 2 は古期英語に初出し現代まで用いられている。「好ましくない意味」である 3, 5, 8, 9 は 1300 年頃に初出し現代に至る。「好ましい意味」は 6, 7, 10 である。好ましい

意味のうちでも 6 はごく初期の頃 (950 年) から用いられている。好ましくない意味 3 の初例もまもなく現れている (1300 年) ており、「中立的」意味、「好ましい」意味、「好ましくない」意味の三者は最初期から現代まで常に輻輳^{ふくそう}して用いられてきた。第四に、green という 1 語が「中立的」、「好ましい」、「好ましくない」という 3 種類の輻輳した意味が不都合なく使い分けられてきた。不都合なく使い分けられるためにはそれなりの識別法が不可欠である。

(27) 全体的に意味の識別は文脈で明らかである。

(27a) 「中立的意味」1, 2, 4

The poor soul sat at sighing by a sycamore tree,

Sing all a green willow;

(*Othello*, 4.3. 42)

(いとしあの子は吐息して、シカモの陰にただひとり

青柳のうたうたいましょ)

(27b) 「好ましくない意味」3, 5, 8, 9

the text is old, the orator too green,

Therefore in sadness, I will away;

(*Venus*, 806-7)

(話題は古びている、話し手はあまりにも若い、

だから、今こそ悲しみのうちに、ここを去ろう)

文中の green が「好ましい意味」なのか「好ましくない意味」なのか、それとも「中立的な意味」なのかは共起する他の語から推測できる。(27a) では willow「柳」から「中立的な意味」、(27b) は sadness「悲しみ」から green は「好ましくない意味」とわかる。

§2. シュミットと green の同義語反復構文

引用 (276) の「好ましくない意味」の特に OED 3.a の意味は、「(病気、気分、不機嫌、恐怖、嫉妬で) 顔色が青ざめた」という意味をはっきりさせるために同義語反復構文をとることが多い。この構文は中期英語以降の口承文芸にいくつかの例が見られる。green が「嫉妬で顔色が青ざめた」という意味で一般民衆に広く用いられていたことは引用 (32) (本稿, pp.19-20) の中期英語の『ハヴェロック (*Havelok*)』の例からもうかがわれる¹³。また、green の「好ましくない意味」を記述したシュミットの *Lexicon* の Green adj. 2) の項はすべて green を含む同義語反復構文の説明と例である。green and yellow, pale and sallow, green and wan, etc. という同義語反復構文が「(不機嫌、病気、恐れ、嫉妬のために) 顔色が悪い」(OED² 3a) ことを表すことは英語に根づいており、シェイクスピア劇の観衆も熟知していた。ここに green-eyed という語形で「嫉妬」を意味することが容易に受け入れられる条件が整っていた。シュミットの

13 博学のスペンサーはこのことを知っていたと考えられる。

Lexicon, Green, 2 の項を引用する。

(29) **Green**, adj. 2) of a sickly and lurid complexion (cf. Green sickness):

- ① *with a green and yellow melancholy* (Tw. II.4.116)
- ② *her vestal livery is but sick and green* (Rom., II. 2. 8)
- ③ *to look so green and pale at what it did so freely* (Mac. I.7. 37)

(Schmidt, *Lexicon* 中の *g.* を *green* に, 引用文を改行, 下線と番号表示①~③を加筆)

シュミットの記述から, *green* が「好ましくない意味」で用いられる場合は同義語反復構文で用いられるので「好ましくない意味」と判断できる。

§3. *OED*² 3.a の記述と *green* の同義語反復構文

また, *OED*² の *green* 3.a の語義説明が, 「嫉妬」を意味する *green-eyed* を示唆している。この場合の記述も引用文も *green* の「好ましくない意味」を中心に展開する。

(30) *OED*² の *green* の項のうち, 関連する 3a を引用する (シェイクスピア以外の引用文は関連語句のみ)。

3. a. Of the complexion (often *green and wan*, *green and pale*): Having a pale, sickly, or bilious hue, indicative of fear, jealousy, ill-humor, or sickness. (Cf. Gr. *χλωρός* *green*, *pale*.) So the green eye, the eye of jealousy (cf. *GREEN-EYED a.*). See also GREEN SICKNESS.

a1300 (grene and wan)

c1300 (grene and bleike)

a1310 (The duke waxed grene)

1525 (pale and grene)

1605 SHAKES. *Macb.* I. vii. 37 Was the hope drunke, Wherein you drest your selfe? Hath it slept since? And wakes it now to looke so greene, and pale, At what it did so freely?

a1650 (pale and grene)

1701 (green consumptive Minds)

1789-94 (greene and pale)

a1845 (green eye)

1863 (green with jelousy)

1887 (still looking very green)

(*OED*² *green* ; 下線, 筆者)

引用文 11 例のうち 6 例が同義語反復構文であり, それ以外の文も文脈から「好ましくない意味」とわかる。*OED*² の 3.a は, なぜ *green* が「嫉妬」を修飾するのかという問いには答えていない。しかし, *OED*² の 3.a の記述からわかることがある。

第一に、green には「緑色の (green leaf), 若々しい (green in spirit)」という良い意味から、「未熟な (green sailor), 青ざめた, 病的な (green with fear)」という好ましくない意味までいろいろの意味があり、相反する意味もあるので、個々の green の意味は文脈によって特定することができるようになってきている¹⁴。

第二に、本稿の問題に関連する、*OED*² の “3.a Having a pale, sickly, or bilious hue, indicative of fear, jealousy, ill-humor, or sickness. 「青白い, 病的な, (胆汁過多による) 気むずかしい表情をしている: 恐怖, 嫉妬, 不機嫌あるいは病気をうかがわせる)」という意味を表す場合、green and wan 「病弱な」もしくは、green and pale 「青白い」という「green and ○○」という形を取る。これは「同義語反復構文 (repetitive word pair)」¹⁵と呼ばれ、その使用目的は以下の3つがある¹⁶。

(31) 同義語反復構文の使用目的

1. 一方の語の意味が多義で曖昧な場合、同じ意味を表す別の語を and で併置することによって意味を特定できる。green and wan もしくは、green and pale とすれば、併置された wan, pale によってこの場合の green の持つ多くの意味のうちでも「青白い顔をした」と特定できる。
2. 一方の語が新奇の外来語である場合、わかりやすい本来語を併置することによって理解を助ける: accomplishment (古フランス語) and fulfilling, mind and purpose (アングロ・フレンチ), turn and translate (ラテン語), fruitful and profitable (古フランス語)。以上、モア (Thomas More) から。
3. ルネサンス期に学者が古典を英語に翻訳する際に、有益と思われる外国語を英語に取り入れようとして意図的にこの構文を利用した: grace (フランス語) and love, hard and difficile (フランス語), true and correcte (ラテン語)。特に、キャクストン (W. Caxton) が多用した。

同義語反復構文の1例として *OED*² に引用されている文を原典 (*Havelok, c1300*) から引用する。

(32) Godard herde here wa—

Per-offe yaf he nouth a stra,
But tok þe maydnes boþe samen
Al so it were upon his gamen,

14 英語の green はどちらかというとき「みどり」から「白」に近いようである (pale, white)。これに対して、日本語の場合、「青」から「黒」に近いようである (「青馬」, 「青毛」, 「みどりの黒髪」)。

15 三輪『シェイクスピアの文法と語彙』第15章「キャクストンの同義語反復構文」, 『英語の辞書史と語彙史』第11章「形容詞の多義性と文法化」。

16 ただし、シェイクスピアは似て非なる「二詞一意 (hendiadys)」という特殊な構文も活用しているので注意が必要である。e.g. shelves and sands (“sandy shelves” *Lucrece*, 335), night and negligence (“negligence at night” *Othello*, 1.1.76). 現代英語の例: nice and warm, fine and pleased. 三輪「シェイクスピアの hendiadys」(『英語の辞書史と語彙史』第9章)。

Al so he wolde with hem leyke
Pat weren for hunger grene and bleike.

(*Havelok*, ll.465-470, ed. by G.V. Smithers)

(ゴダードは子供たちの嘆きをききましたが、
それをわらしべ一本ほどにも気にとめず、
飢えのため血の気も失せて土気色のふたりの娘を、
まるで戯れのように—
まるで娘たちと遊ぼうとするかのように
一緒につかまえました。)

この文中の *grene and bleike* が同義語反復構文であり、“green and white”を意味し、「白い」を意味する *bleike* (< ON *bleik-r* “white” cf. *blac, blake*) が対語に用いられている。このことから *green* は *pale* 「青白い」よりも程度の強い「土気色=死人の顔色」を表す¹⁷。また、*green* が「土気色」という意味で用いられている『ハヴェロック』という作品は、『ハムレット』と同じく古ノルド語が話されていたデンマークが物語の主たる舞台であることから古くからの表現であることがわかる。この引用文は、猫が獲物を捕まえた時に示す行動を思わせる。

第三に、*the green eye* の場合は、*grass* や *leaf* ではなく、*eye* という特定の語に前置されることによって「嫉妬に狂った」を意味するとわかる。

第四に、*OED*² 3.a にあげられている意義説明 (a *pale, sickly, or bilious hue, indicative of fear, jealousy, ill-humor, or sickness*) と引用例は、*green* が「病的な、青白い」という意味から「嫉妬に狂った」へと推移してゆく過程をたどっているように読める。

§4. シェイクスピアの *green* の同義語反復構文の実例

シェイクスピアにおける「恐怖、嫉妬、不機嫌、(病気を表す) 青ざめた、病的な、不機嫌な表情」という意味の *green* について考えてみる。

The Harvard Concordance to Shakespeare の掲載順に実際にシェイクスピアが使用した *green* のうち *OED*² の *green* 3.a に該当する 4 例を取り上げて検討する。

(33) *OED*² の *green* 3.a に該当する例

- (a) *green* indeed is the color of lovers; (LLL 1.02. 86)
(なるほど。青は、恋人たちの色じゃ。)

この箇所に関する研究社 (1967) の注釈。

「緑は恋する者たちの色」いわゆる *green sickness* への言及。

(*Love's Labour's Lost*, 研究社 1967, p.140)

17 三輪『英語の語彙史』第10章「*Havelok the Dane* の色彩語」pp.141f.

(b) and with a green and yellow melancholy (TN 2.04. 113)

(悩み、青ざめ、憂いにやつれながらも、)

研究社 (1967) と The Riverside Shakespeare の注釈。

“green” = pale, sickly

(*Twelfth Night*, 研究社 1967, p.150)

green and yellow: pale and sallow

(*Twelfth Night*, The Riverside Shakespeare, p.420)

研究社 (1967) と The Riverside Shakespeare によると、この green は「青白い、病的な」を表している。また、The New Cambridge Shakespeare には以下のような注釈がある。

The pallor typical of a melancholic lover, according to Jaques Ferrand’s ‘Erotomania, is either a mixture of white and yellow or of white, yellow and green (French edn. 1612, trans. 1640, p. 121, quoted in Lawrence Babb, *The Elizabethan Malady*, 1951, p. 136).

(*Twelfth Night*, The New Cambridge Shakespeare, p.86)

色情狂によって顔色が悪くなっている状態を表す語は白、黄色、緑の混合によって表される。したがって、顔色について green を用いる場合は「青ざめている」と解釈される¹⁸。

(c) her vestal livery is but sick and green, (ROM 2.02. 8)

(月の処女のお仕着せは、病に蒼ざめた緑の色に決まっている。)

この箇所については、研究社 (1967) と The Riverside Shakespeare に以下の注釈がある。

sick and green = pale green. “sick” = of a sickly hue, pale.

(*Romeo and Juliet*, 研究社 1967, p.183)

Alluding to a kind of anemia called “the green-sickness,” supposed to be found in unmarried girls. (The Riverside Shakespeare, p.1068)

研究社 (1967) と The Riverside Shakespeare の注釈によると、sick and green とは pale green のことであり、まだ結婚していない思春期の少女に見られる貧血症 (anemia) のことである。つまりこの sick and green は顔色が「青ざめた、蒼白の」である。

18 green が either a mixture of white and yellow or of white, yellow and green 「白と黄、あるいは白、黄、みどりの混ぜあわさった顔色の悪さ、青白い顔色」を意味する。つまり「みどり色」がいわゆる「緑色」より薄いのである。

(d) And wakes it now, to look so green and pale (MAC 1.07. 37)

(いまは見るだけで顔がまっ青になる)

この箇所については、The Riverside Shakespeare に green: sickly とあるようにこの green は「(人、顔色などが) 病弱な、青ざめた、蒼白の」である。

green の「恐怖、嫉妬、不機嫌、(病気を表す) 青ざめた、病的な、不機嫌な表情」という意味は「嫉妬に狂った」と密接に関連することがうかがわれる。「嫉妬」への第二の要因である。

以上、本章の §1 から §4 にわたって green の同義語反復構文について、シュミットの Green, adj. 2) の記述、OED² 3.a の記述、それに、シェイクスピアにおける green を含む同義語反復義構文について論じてきたことは、以下のように結論することができる。

シュミットも OED² 3.a も green が「好ましくない意味」で用いられるのは同義語反復構文においてである。シェイクスピアにもその傾向が顕著である。実は、遠い昔のゲルマン祖語の時代から英語に受け継がれてきた green の「好ましくない意味」がこの構文の背景にあるように思われる。アングロサクソン人の大陸時代の故地 (Heimat) に隣接するデンマークを主たる舞台として展開する中期英語期の『ハヴェロック』(1300) にも現れている。そして、シェイクスピアにも顕著にみられることは、シュミットと OED² 3.a の記述に明瞭に読み取ることができる。シェイクスピアに用いられた「好ましくない意味」合計 4 例のうち 3 例はこの同義語反復構文に用いられている。OED² 3.a にあげられている意味と引用例は、green が「病的な、青白い」という意味から「嫉妬に狂った」へと推移してゆく過程をたどっているように読める (a pale, sickly, or bilious hue → indicative of fear, jealousy, ill-humor, or sickness)。引用例も 11 例中 6 例が同義語反復構文であり、さらにもう 1 例は、green with jealousy である。green の「好ましくない意味」には pale, sickly に始まり jealousy に至る過程のすべてが含意されていると考えられる。

猫の性格を中心に、外堀を埋めるような証拠から、猫が残忍な性癖をもち、嫉妬という意味に結びつきやすいということは諸家の認めるところである。しかし、これだけではどうしても隔靴搔痒の感を免れない。そこで言語としての近代英語とシェイクスピアという言語感覚に優れた詩人に視点を限定して、文献資料を再検討して、なぜ green-eyed が「嫉妬」を形容して使われるようになったのかを考えてみる。

まず、ひとつの手がかりとして、シェイクスピアの英語に、green-eyed に類する表現が他にもあるかどうかを調べるために『シェイクスピア逆引辞典』¹⁹ によって形態の類する語を検索してみる。シェイクスピア全作品の中で -eyed を有する語は 16 例ある。sad-eyed, fire-eyed, blue-eyed, young-eyed, thick-eyed, dark-eyed, evil-eyed, wall-eyed, dull-eyed, green-eyed, open-eyed, onion-eyed, sour-eyed, hollow-eyed, grey-eyed, dizzy-eyed である。シェイクスピアを初例とする

19 unpublished.

語は全部で4語である：fire-eyed, young-eyed, green-eyed, grey-eyed。16語のうちほとんどはその意味は簡潔で明らかである。その中から green-eyed と green-eyed に関連し、しかも意味が不明瞭な2語をとりあげて考察する。grey-eyed, wall-eyed である。

第4章 grey-eyed, whall eyes, wall eyes から green-eyed へ—要因その3—

§1. grey-eyed

*OED*² の grey-eyed の初例となっている, *Romeo & Juliet* (1594-95) からの一文をまず引用する。

(34) The gray ey'd morne smiles on the frowning night.

(*Rom. & Jul.* II . iii. 1)

(薄墨色の目をした朝が、夜のしかめ面に^{ほほえ}微笑みかけ)

次に, grey と eye が同一文中に現れる3幕5場 19-20 から引用する(下線, 筆者)。

(35) I'll say yon grey is not the morning's eye,
'Tis but the pale reflex of Cynthia's brow;

(*Rom. & Jul.* III . v . 19-20)

(あのほの明かりも朝の瞳ではない、月の女神の面からの、
ただ蒼白い照り返しだとしておきましょう)

後世, grey-eyed を踏襲した詩人は, Eachard (1670), Gay (1670), Tennyson (1830), Palgrave (1871) である。これらはすべて文学的な詩文であって、一般庶民の口語ではないことに注意する必要がある。つまり, grey-eyed は、雅文風の詩には利用されても一般庶民の日常的な口語には使われてはいない。

(34) と (35) の引用文中の The gray ey'd morne と grey is not the morning's eye は「嫉妬」とは直接には関係しない。しかし, (34) の grey-eyed はシェイクスピアが初例であることと、同じ文中に関連しあって連想を容易にする素材となる gray, eye (*Rom.* II . iii. 1) と grey, pale, eye (*Rom.* III . v . 19-20) 共起していることには注意が必要である。また、この場面の前後には, green-eyed 形成への素材となる語句がいくつも見いだされる。frowning, burning eye, grey-eyed; grey, pale, morning's eye, brow といった語が繰り返し用いられて green-eyed (=jealousy) が生み出される環境作りをしている。

さらに, *OED*² が grey-eyde (34) と並んであげているスペンサーの一句、

(36) Having grey-eyes.

1596 SPENSER *F.Q.* 【*Faerie Queene*】 iv. xi. 48 The gray-eyde Doris.

(*OED*², gray-eyed)

(灰色の目をしたドーリス)

に現れる gray-eyde も「嫉妬」とは一見したところではまったく関係ない。しかし、スペンサーの gray-eyde と同じ文中に「緑の髪で飾られた美しい乙女」(注 24 参照) が用いられており、green, grey, eye が共鳴し合っていることに注意すべきである。シェイクスピアは当時評判であったスペンサーの *F. Q. (Faerie Queene* 『妖精の女王』 Bk. I ~ III, 1590; Bk. I ~ VI, 1596) を読んでいたことであろう。したがって、スペンサーの whally eies (the signe of gelyosy^(ママ)) (*F. Q.* I, iv, 24) と The gray-eyde Doris (*F. Q.* iv. xi. 48) も影響を与えていることであろう²⁰。

注目すべきことは、*Rom.* ii. iii. 1 の gray ey'd (morne) はシェイクスピアが初例である²¹。したがって、鋭敏な語感と天賦の詩才を持つシェイクスピアが、自分自身の独創になる新語、新語法である gray ey'd morne (*Rom. & Jul.* ii. iii. 1), grey is not the morning's eye (*Rom. & Jul.* iii. v. 19-20) に加えて、スペンサーの gray-eyde Doris といった語形から green-eyed という語形に、はるか遠い昔から green, grey に込められていた「嫉妬」の意味を織り込むことはごく自然な結果であろう。OED² に記されているような徐々の意味変化に、素材となる gray, eye, gray-eyde, pale, sick(ly), green といった *Rom. & Jul.* (1594-95) で用いられた語と語形に天才詩人シェイクスピアの感性から生じる「ひらめき (inspiration)」が触媒作用して、green-eyed という新語が誕生するのはもはや時間の問題であろう。

green-eyed は *Romeo & Juliet* (1594-95) の 2 年後の *The Merchant of Venice* (1596-97) と 10 年後の *Othello* (1604-05) で各 1 回用いられている。これが英語史における green-eyed の初出である。改めて引用する。

- (37) *Por.* How all the other passions fleet to air,
 As doubtful thoughts, and rash-embrace'd despair,
 And shudd'ring fear, and **green-eyed** jealousy!
 (*The Merchant of Venice*, 1596-7, III. ii. 107-11, Riverside Shakespeare)
 (ああ、他の感情はみんな飛び去ってゆく——
 気がかりだった心配も、あわてて持っていた絶望も、
 身をふるわすような不安も、緑の目をした嫉妬も！)

- (38) *Iago.* O, beware, my lord, of jealousy!
 It is the **green-ey'd** monster which doth mock
 The meat it feeds on.
 (*Othello*, 1604-5, III. iii. 165-68, Riverside Shakespeare)
 (閣下、嫉妬は恐ろしゅうございますよ。
 こいつはいやな色の目をした怪物で、人の心を食物にして、
 しかも食う前にさんざん楽しむというやつです。)

20 すでに1579年出版の *The Shepheardes Calender* はシェイクスピアも賛辞を惜まず、一般読書界でも詩人として名声を得ていたスペンサーの *Faerie Queene* (Bk. I ~ III, 1590; Bk. I ~ VI, 1596) をシェイクスピアが読んでいないはずはない。細江注釈版 pp. xxviii.

21 上記参照。cf. Onions, *Glossary*, p.97.

「こいつはいやな色の目をした怪物で、人の心を食物にして、しかも食う前にさんざん楽しむというやつです。」という表現は猫に関する *Encyclopædia Britannica* とゴールドスミス『動物誌』の記述と酷似している。『動物誌』の「とらえた小さな獲物を即座に殺さず、面白半分にもてあそぶのは、その中でも最も悪名高きものである。」を思い起こさせる。さらには中世の叙事詩『ハヴェロック』を思い起こさせる。

Othello, III. iii. 165-68 の前後に、green-eyed jealousy を確実に印象づけるために jealousy という語が5回も用いられている²²。

§2. wall-eyed と whally-eyed—ネアズ (R. Nares) の記述

ここまで、green-eyed を、当然のことながら、green, eye, -ed という本来語2語と接尾辞 -ed からなる合成語とみなして考察してきた。しかし、『シェイクスピア逆引辞典』にある計16の -eyed を後半の要素に持つ語 (p.21) を調べてみると意外なことがわかってくる。問題の語は wall-eyed である。

シュミットは以下のように記している。

- (39) **Wall-eyed**, glaring-eyed, fierce eyed: *wall-eyed wrath or staring rage*, John IV, 3, 49. *say, wall-eyed slave*, Tit. V, 1, 44. (As for the origin of the expression, Nares observes: Whally, applied to eyes, means discoloured, or, what are now called wall-eyes; from whaule, or whall, the disease of the eyes called glaucoma).

(Schmidt, *Sh. Lexicon*, Wall-eyed, 下線, 筆者)

【大意】 wall-eyed 「にらみつける目、激怒した目」という意味 : wall-eyed wrath or staring rage 「(『ジョン王』 IV.3.49) と、say, wall-eyed slave (『タイタス・アンドロニカス』 V, 1, 44) の2回²³。この語の語源について、ネアズ (Nares) は、「目について用いられた whally は「変色した目」あるいは現在の「wall-eyes (角膜白斑, 緑内障) を意味する。(whally は) whaule あるいは whall が語源」と述べている。

シュミットに言及されているネアズの辞書 (1852) を参照すると以下のように記されている。これが wall-eyed に関しての最初の詳細な記述である。なぜ green-eyed が「嫉妬」を意味するのがネアズの記述からうかがうことができる。問題となる、冒頭から3分の2を引用する。

22 『オセロ』の登場人物の名前は暗示的である : Iago = **ego**, Othello = oth+**hell**+o (O/Oh + the + **hell**), Desdemona = des + **demon** + a (cf. デカルト : René Descartes = René **des** Cartes = カルト家のルネ), Daniel Defoe = Daniel + **de** + foe = 馬鹿のダニエル)。

23 『タイタス・アンドロニカス』のこの箇所も the incarnated devil「悪魔の化身」, the base fruit of her burning lust「彼女の燃えさかる情欲」, This growing image of thy fiend-like face「だんだんと大きくなってゆく悪鬼のような形相」(V. I. 40-5) といった台詞が繰り返されていて暗示的である。

(40) **WHALLY**, *a.*,

- ① applied to eyes, means discoloured, or, what are now called *wall-eyes*;
- ② from *whaule*, or *whall*, the disease of the eyes called *glaucoma*.
- ③ Applied to jealousy, in the following instance, it seems to mean *green-eyed*, which is the usual description of that passion.
- ④ The poet describes Lust, as riding
Upon a beaded gote, whose rugged heare
And *whally* eies (the signe of gelosy)
Was like the person selfe. *Spens. F.Q.* I, iv, 24.
- ⑤ Upton, and all the commentators, explain it streaked, from *wala*, Saxon; whence also a *wheal*, or *wale*, the mark of a lash on the skin. Not conceiving, however, how *streaked* eyes were at all characteristic of jealousy, I had conjectured that *wall-eyed* must be meant;
- ⑥ when I found this remarkable proof of it, given by my friend Todd, under *Walleye*, in T.J. “This word is not written *wall*, but *whall*, in our old language;” (...)

(R. Nares, *A GLOSSARY; OR, COLLECTION OF WORDS, PHRASES, NAMES, AND ALLUSIONS TO CUSTOMS, PROVERBS, ETC.*, (...) 1852, 下線, 筆者;
下記の説明のために番号①～⑥を挿入)

【大意】

- ① 「(目が)濁った」病気, 現在の *wall-eyes*。
- ② 「緑内障 (*glaucoma*)」と称される病気である *whaule*, *whall* に由来。
- ③ 次に引用するスペンサーからの引用文にみられるように「嫉妬 (*green-eyed = jealousy*)」を修飾する常套句。
- ④ スペンサーの一節は「*gote* (好色の象徴) → *Lust* (肉欲) → *green-eyed* (「嫉妬」の象徴) → *whally eies* (the signe of gelosy 「嫉妬の兆候」) → the person selfe (肉欲が嫉妬を誘発する = 人間そのもの)」と連想させている。
- ⑤ スペンサーの *Faerie Qveene* I, iv, 24 に関して, アプトン他すべての注釈者が, 語源は古サクソン語の *walla* で *streaked* 「筋模様のついた」を意味し, 「肌についたムチのあと」を意味する *wheal*, *wale* に由来するとしている。
- ⑥ トッド (H.J. Todd) によれば, 古サクソン語に由来する *whally* (“green”) が *gelosy* (the signe of gelosy) を意味する。それが英語に借用されて *whally eies* (“gelosy=jealousy”) となった【スペンサーはこのことを知っていて *whally eies = (the signe of gelosy)* と書いた】。

ネアズの記述によると, 現在, 馬の目の病気に特定されている *wall-eyed* の元の形は *whaule*-, *whall-eye* である。その語源は古サクソン語の *walla* “*streaked* 「筋模様のついた」” である。ゲルマン人の世界では, 古来「山羊」が「好色」を象徴すること, 虹の色が6色とされていることと並んで, 古サクソン語の *whally eies* は「嫉妬 (*gelosy*)」を意味することをスペンサーは知っ

ていて用いたが²⁴、念のために *whally eies* (the signe of gelosy) と説明を加えた(下線, 筆者)。

Titus Andronicus (1593-4), *King John* (1596-7) の *wall-eyed* と *Romeo and Juliet* (1594-5) の *gray-eyed* (2回) という実験的な語を使ったが目指すほどの効果を得られなかった²⁵ シェイクスピアは、同じ時期に発表されたスペンサーの *whally eies* (the signe of gelosy) に触発されて、*Titus Andronicus*, *King John* の *wall-eyed*, *Romeo* の *gray-eyed* を、スペンサーの *whally eies* (the signe of gelosy) の *whally* を *green* に取り替えて合成することによって *green-eyed* を造語した。このことはシェイクスピアが、自らの繊細な語感、天賦の詩才に加えて、古典の作品のみならず、古来、ヨーロッパに受け継がれてきた民間伝承、スペンサーなど同時代の作家・作品、近代社会になって台頭する一般庶民の活力のある口語、さらには伝統の香り豊かな中部、北部方言をも幅広く、注意深く観察していたことを証明している²⁶。

社会、文化、歴史、流行といった種々雑多な要素に加えて、^と研ぎすまされた語感を駆使して、もっとも基本的な1音節の本来語のひとつである *green* を登用するという簡潔無比な形態に過去にない新鮮で、深遠な意味を凝縮させたのが *green-eyed* であり、シェイクスピアの究極の語形成法である²⁷。

§3. *whally-eyes* から *green-eyed* へ — スキート (W.W. Skeat) の記述

スペンサーが使ったのは *whally-eye* である。では、なぜ *whally-eye* がシェイクスピアでは *green-eyed* になったのか。

この件に関しては、ネアズ (1852) の後、スキート (W. W. Skeat) が、当時成長著しかった印欧比較言語学の知見を加味して記述している。スキートの語源辞典 (1879-82, rpt. 1978) の *wall-eyed* の項から関連部分を引用し、読みやすくするために引用文に①～⑧の番号を付し、行替えをして、補足説明 (【 】) を加えて解説する。

(41) **WALL-EYED**, with glaring eyes, diseased eyes.

- ① (Scand.)
- ② 【**wall-eyed**】 In Shak. K. John, iv. 3. 49, Titus, v. I. 【ママ】 44.
- ③ Spenser has whally eyes, F.Q. I. iv. 24.
- ④ ‘*Glauciolus*, An 【ママ】 horse with a *waule eye*;’ Cooper’s Thesaurus, ed. 1565.

24 次に続く *F.Q.* I, iv, 25, 217の, ‘In a greene gownne he clothed was full faire,’ に関する細江注 (p.370) に「*greene* gownne「緑」は嫉妬の色であり又淫慾の色である。」とある。下線, 筆者。

25 *wall-eyed* では「壁の目を持った」を解釈されて、せいぜい「漆喰の(白い)色の目」という意味にしかならない。*gray-eyed* では「灰色の目」, あるいは「黒い目, 青い目, クマのある目」などと曖昧になってしまう(三輪『シェイクスピアの文法と語彙』第10章)。

26 三輪「auburn: シェイクスピアの色彩語」2015, 『地域政策科学研究』第12号。

27 詩人チョーサー (1340?-1400?), 辞書編纂家コケラム (flourished, 1623-58), 哲学者 F. ベーコン (1561-1626) とシェイクスピアそれぞれが考案した新語を比べるとシェイクスピアの卓越した才能がよくわかる。しかし、シェイクスピアを初出とする多くの新語、新語義が庶民の間ですでに使われていたことは記憶にとどめておくべきである。*green-eyed* もその例である。シェイクスピアを初出とする語彙集は、McQuain & Stanley Malles, *Coined by Shakespeare: Words & Meanings First Penned by the Bard*, 1998, があるが、網羅的な研究書が国内で出版されている: 『シェイクスピアの新語, 新語義の研究』岡村俊明, 1996, 溪水社。

- ⑤ Nares writes it *whally*, and explain it from *whaule* or *whall*, the disease of the eyes called *glaucoma*; and cites: ‘*Glaucoma*, a disease in the eye; some think it to be a *whal eie*;’ A. Fleming’s *Nomanclator*, p.428.
- ⑥ Cotgrave has : ‘*Oeil de chevre*, a *whall*, or over-white eye; an eie full of white spots, or whose apple seems divided by a streak of white.’
- ⑦ But the spelling with *h* is wrong.
ME. *wald-eyed*, Wars of Alexander, 608;
wolden-eighed, King Alis. 5274.
Also *wawil-eyed*, Wars of Alexander, 1706.
- ⑧ Icel. *vald-eygðr*, a corrupted form of *vagl-eygr*, wall-eyed, said of a horse. – Icel. *vagl*, a beam, also a beam in the eye, a disease of the eye (as in *vagl ā auga*, a wall in the eye); and *eygr*, *eygðr*, eyed, an adj. formed from *auga*, the eye, which is cognate with E. [= English] **Eye**.

(W.W. Skeat, *An Etymological Dict. of the Eng. Lang.*, 1910⁴, rpt.1978)

スキートの WALL-EYED を訳述する。

(42)

- ① 語源はスカンディナビア語 【Old Norse = 古ノルド語】
- ② wall-eyed としてシェイクスピアの *King John*, iv. 3. 49, *Titus Andronicus*, v. I. 44. に用いられている。
- ③ スペンサーに *whally eyes* として, *Faerie Qveene* (1590, 1596) I. iv. 24 にあり。
- ④ クーパー (Cooper’s *Thesaurus*, 1565 版) に ‘*Glauciolus*, An horse with a *waule eye*;’ として掲載。
- ⑤ ネアズ (Nares) は *whally* と綴り, *whaule* あるいは *whall* が語源とする。意味は *glaucoma* という目の病気。そして, フレミンクの ‘*Glaucoma*, a disease in the eye; some think it to be a *whal eie*;’ (A. Fleming, *Nomanclator*, p.428) を引用している。
- ⑥ コトグレイブの仏英辞典 (1611) にはフランス語 *Oeil de chevre* に英語の a *whall* と記されている。
- ⑦ 以上の wh- 形は間違いで, 以下に -h- のない正しい例 【この件については次の第 5 章で論じる。】
- ⑧ 語源は, アイスランド語の *vald-eygðr* (*vagl-eygr*, wall-eyed) のなまった形。馬の病気について用いる。アイスランド語の *vagl* は「縞模様, 目に生じた縞模様, 目の病気」; *eygr*, *eygðr*, は *auga* (目) の形容詞で英語の *eye* と同じ語源。

この引用文中で特に注意すべきは, ③である。

③の Spenser, *F.Q.* 【*The Faerie Qveene*, 1590 (Bk. I ~ III), 1596 (Bk. I ~ VI)】 Bk. I. iv. 24 の前半 4 行は以下のようになっている。

(43) Bk. I . iv. XXIV

And next to him rode lustful Lechery,
Vpon a beaded Goat, whose rugged haire,
And whally eyes (the signe of gelosy.)
Was like the person selfe, whom he did beare:

(Spenser, *The Faerie Qveene*, BK. I . iv. 24, 細江注釈版, 1929, p.59, 下線, 筆者)
(その次に進むのは、淫らな好色で、
髪をはやした山羊に乗っていたが、この山羊の
もじゃもじゃの毛と白く濁った目(嫉妬の印)は、
乗せている人物にそっくりだった。)

(和田勇・福田昇八訳『妖精の女王』 p.54)

BK. I . iv. 24 の Goat には「古来、山羊は好色な動物」、whally eyes には「白く濁った目とは、猜疑心のため、絶えずくるくると回る嫉妬の目のこと」、さらに、iv.25 の「この男は緑の衣を美しく着こなして」には「緑色は嫉妬・淫欲の色」という訳注がある(和田・福田訳, p.63)。古来、「山羊」は好色の印、「白く濁った目」は嫉妬の印と信じられてきたことがわかる。そして、細江逸記は以下のような注釈を残している。

(44) 209. **a bearded Goat** 昔から山羊は好色のものとせられた。

210. **whally eyes**=eyes marked with greenish streaks. “whally” 今は用いないが虹彩に緑がかった線の見えるのや、又は所謂「緑内障」(glaucoma)に罹った目をいふので、意味は色々に変わって用ひられるが中部以北の方言で“wall-eye”といふのがそれである。

gelosy=jealousy. Cf. II . 42,102.「緑」は嫉妬の色である。(cf. *Merchant of Venice*, III . ii . 110: “green-ey’d jealousy”; also *Othello*, III .iii. 116)。

(Spenser, *F. Q.* BK. I . iv. 24, 細江注釈版, p.369, 下線, 筆者)

篤学の士であった細江は(40)のネアズの記述に引用されているスペンサーの *Faerie Qveene* の注釈(本稿(41)の③)に“Upton, and all the commentators, explain it streaked, from wala, Saxon”として言及されているアプトン(Upton)の *Glossary & Notes* を参照していたと思われる²⁸。

28 細江注釈本参照。細江はこの注釈を執筆するにあたり、「Globe Editionのスペンサーの全集を耽読した」(「序」)。細江のp. lxxiiiにJohn Upton編纂の *Faerie Qveene with Glossary & Notes* (1758)の記載がある。

第5章 結論 シェイクスピアにみる究極の語形成法

第一に、スキートは、引用 (41) の⑦の後に、“But the spelling with *h* is wrong.”と注記して「*whally, whaule, whall*, など *h* の付くのは間違い」であり、「ME. *wald-eyed, wolden-eighed, wawil-eyed*」が正しいとしている。一方、*OED*² の記述は、基本的にはスキートに基づき、*wall-* 系統を正統な語形としている。が、語源の北欧語からみれば *wh-* 系統が原語の発音に近い。ただし、英語の発音とはかけ離れた原音を正確に写し取ることは所詮無理であり、どちらが正しいというわけではない。

*OED*² の *wall-eyed* の記述を点検する。

(45) **wall-eyed**, *a.*

Forms: α . 5 *wawil-*, *waugle-*, 6 *whaule-*, 7 *whale-*, 6- *wall-eyed*;

β . 5 *wald-ezed*.

[The surviving form descends from ME. *wawil-eȝed*, *a.* ON. *vagle-eyg-r*, (...) and explained in the context to mean ‘having speckled eyes’. (...) The first element, *vagl*, is obscure origin; it coincides in form with *vagl* beam of wood, roost, perch (Da., Norw. *vagl*, Sw. *vagel*) (...)]

1. Having one or both eyes of an excessively light colour, so that the iris is hardly distinguishable from the white. In ME. and in modern dialects (see. *Eng. Dial. Dict.*), also in other senses: Having eyes of differing colour; having eyes or an eye streaked or particoloured. (...)

In many examples the senses cannot be determined. (...)

(*OED*², *wall-eyed*, 下線, 筆者)

*OED*² の記述から次のことがわかる。

まず第一に、*wall* の形態が多様である²⁹。

 α 系統

15 世紀だけの語形 *wawil-*, *waugle-*

16 世紀だけの語形 *whaule-*,

17 世紀だけの語形 *whale-*

16 世紀以降, 現代英語の語形 *wall-eyed*

 β 系統

15 世紀のみ *wald-eȝed*

29 たとえば, *uisgebeatha* という Scottish-Gaelic 語に対して, *whisky* という綴り字と発音が定着するまでにどれほどの迂路をたどったかをみるだけでもイギリス人にとって古北欧諸語の発音がいかに難しかったかがわかる。cf. *OED*² *whisky*.

このようなさまざまな形態は、中期英語期における wawil-eged の借用元である古ノルド語の語形が vagle-eygr-r であって、この語の発音がイギリス人にはなじめなかったことが原因である。

北ゲルマン語系のデンマーク語、ノルウェー語、アイスランド語などは、同じゲルマン語派系の言語とはいえ、北部ヨーロッパに位置し、比較的隔絶された環境にあり、一部にゲルマン祖語に近いゴート語よりも古い要素をとどめるほど古い姿をとどめていた。したがって、南ヨーロッパの諸言語との接触もあって文法組織の簡素化、水平化の著しく進んだ西ゲルマン語系の英語とはかなりかけ離れてしまっていた。それゆえに、北欧諸語の発音体系と英語の発音体系は、それぞれ違った体系に変化し、外国語どうしとして接触した場合には意思の疎通は困難になっていた。たとえば、アイスランド語の *vagl-eygr* “wall-eyed” が中期英語期から 1600 年頃までさまざまな綴り字で表されているということは、英語にはなくなって久し *vagl-eygr* という発音形態（古期英語期にはなかった語頭の *v*、英語にはない音質の語中の母音 *a*、*e*、それに語末の *-ygr-* という 3 子音の連鎖）がイギリス人には正確に聴取できなかったことを表している³⁰。イギリス人は、接触した地域での受け取り方の違いにより、あるいはデンマーク語、ノルウェー語といった相手方言語の発音の違いを聞き分けられないで自分たちの間違った理解に基づきさまざまな表記を残した。それが *OED*² が記述している *wh-* のさまざまな語形に表されている。その結果、語頭に *wh-* 系の子音結合を持つ語形は結局破棄された。

破棄されたその他の理由は次の通りである。英語の場合、語頭に *wh-* を持つ重要な語は少なく、*white* の他は、関係詞・疑問詞 *who*, *which*, *what*, etc.; *where*, *why*, *when*, etc., *whisky*（外来語）、*wheel*, *whip* などに限られ、意味・用法が特定化されている。関係詞・疑問詞以外の語の場合、極端な場合、*whale-eyed* は「鯨の目」という特殊な解釈を生み、ある語形は *white-eyed* と解釈されて「白みがかった目」というこれまた特殊化された解釈を生み出した。また、英語の発音・語形に適合するように手直しを受けて³¹ *wall-eyed* という語形が生みだされたが、*wall* → 「壁、特に漆喰³²の色」→ 「壁のような白みがかった目の色」という連想が働き、もともとの形態と意味からかけ離れてしまった。一方、意味に重きを置いた解釈は *gray* と「連合関係」³³ をなす *gray-eyed* を生み出したが、*OED*² からの引用 (45) にもあるように *wall-eye* という病気の目の色の識別がはっきりせず、その上、当時は、*gray* の意味が曖昧で思うような効果はなかった。

そこでシェイクスピアは本稿で述べてきた言語内的（発音、文法）な規則と言語外的な要素（習俗、伝説、文化）をたくみに織りなして、*gray* と連合関係をなす *green* を登用して *green-eyed* という単語の語源と歴史、英文学史上比類ない珠玉の 1 語を紡ぎ出した。この語形成法は『不思議の国にアリス』においてルイス・キャロルが創作した *Mock Turtle*（ニセ海亀）を

30 *egg* の例にみられるイエスベルセンの古北欧語からの借用語に関する引用と説明は、明快なので思わず納得してしまうが、文字通り受け取るのはいささか安易ではなかろうか。cf. Jespersen, *Growth and Structure of the English language*, pp.63ff.

31 三輪「auburn—シェイクスピアの色彩語—」p.129。なお、*wall-eyed* は「馬の目の病気」に特定されて、他の語との混同の生じない獣医学という特殊な分野での学術用語として生き残った。*OED*², *wall-eyed*, 1.b. of horses.

32 日本語でも「漆喰」は「石灰」を語源とすることからもわかるように白色が基調。

33 有馬道子『日英語と文化の記号論』pp.53-63、三輪『ソシュールとサビアの言語思想』pp.27-31。

連想させる (turtle soup + green turtle soup → mock turtle soup → Mock Turtle)。強固に安定した言語の内的構造の周辺にあって構造に組み入れられていない記号が構造の周辺から想像的な生命力をえて構造の内部に食い込んでゆく現象である³⁴。

第二に、下線部にあるように、目の色がはっきりとした「みどり」ではなく、きわめて薄く「白っぽい」色であったので、言語によって、民族によって、個人によって green, grey, blue, yellow あるいは white と混同され、明確に区別されないことがしばしばであった。このことが、イギリスの中部以北の方言、ケルト語、ノルド語でこれらの色の識別が一定していない原因になっている³⁵。

green-eyed 成立に至るまでの過程とその後の状況を時間軸に沿って簡潔に図示する。

(46) green-eyed への編年史

年号	著者	掲載作品	語形	
green-eyed への醸成期				
a1400-50	<i>Wars Alex.</i>	(<i>OED</i> ² wall-eyed)	wald-eȝed, wawill-eȝed	
1552:	Huloet	(<i>OED</i> ² wall-eyed)	whaule	
1578:	Cooper	<i>Thesaurus</i>	waule eye	
1590, 1596	Spenser	<i>Faerie Qveene.</i> 1590 (Bk. I ~ III), 1596 (Bk. I ~ VI)	whally-eyes (the sign of gelosy)	
1593-4	Shakespeare	<i>Titus Andronicus</i>	wall-eyed	
1594-5	Shakespeare	<i>Romeo & Juliet</i>	gray-eyed	
1596-7	Shakespeare	<i>King John,</i>	wall-eyed	
green-eyed 登場				
1596-7	Shakespeare	<i>Merchant of Venice,</i>	green-eyed	
1604-5	Shakespeare	<i>Othello</i>	green-eyed	
1627	Milton	<i>Vac. Exerc (OED</i> ²)	green-eyed	
1653	R. Sanders	<i>Physion. (OED</i> ²)	green-eyed	
c 1800	H.K. White	<i>Genius I. i. (OED</i> ²)	Green-eyed (Grief)	
1804		<i>Sporting Mag. (OED</i> ²)	Green-eyed (monster)	口語
1836	Richardson	<i>A New Dictionary</i>		
1882	Nares	<i>A Glossary;</i>		
1865	L. Carroll	<i>Alice's Adventures</i>	green-eyed (cat)	口語
		<i>Aesop's Fables</i>	green-eyed, green eye	口語
1894-6	G.F. Northall	<i>A Glossary</i>	Wall-eyed	方言

34 有馬道子, 同上書, pp.71-4. 稲木昭子・沖田知子『アリスのことば学』2015。

35 注8参照。郡司利男はこれらの言語間の green, grey, yellow, blue の意味領域のずれについて論じている。郡司「色と言葉」『英語学ノート』1978, pp.1~15。日本語の「青そこひ」「緑内障」という病名にも曖昧さがみえる。

結局、本稿で、外堀から順次、慎重に、しばしば冗長なまでに、螺旋階段を一步一步のぼるがごとくに論じてきたいろいろな状況、関連語、造語例から最終的にシェイクスピアがその卓越した詩才、語感に基づき、想像力・創造力を遺憾なく発揮して造語した green-eyed は英語の語形成史上、英文学史上類をみないできごととなった。本稿の全編にわたり、人間の精神作用、動物誌、文化史、歴史、言語史など人文科学のほぼ全分野にわたり長々と論じたすべての要素と精髓が green-eyed 1 語に凝縮されている。

すでに一般民衆が無意識のうちに用いていた green-eyed がシェイクスピアにより見いだされ、評判が高く人気のあった劇 *The Merchant of Venice* と *Othello* のクライマックスの場面で使用されたために広く用いられるようになった³⁶。young-eyed, sad-eyed, dull-eyed といった他の -eyed を持つ語と比べれば、green-eyed がいかに光り輝いているかは一目瞭然である。シェイクスピアが新たに造語した語は枚挙にいとまがないが、green-eyed はその中でもとりわけ群を抜いて重要な語である。特に問題視されている語の研究には人文科学の広く深い知見と柔軟で豊かな創造力、想像力が必要とされる理由である。

green-eyed は、古北欧語から借用されたときからシェイクスピアの時代になっても、音声、形態、意味のどの点においても混乱状態にあった。シェイクスピアによって green-eyed という語形が形成されるまでは文学者、諸分野の著作家も様々な発音、形態、意味で使用し、音声も、語形も、意味も錯綜し、交錯する中で、広大な砂浜の中からピンポイントでコメ 1 粒を拾い出すがごとく、外来語ではなく的確無比の 1 語である本来語の green に着眼し、選択し、登用して green-eyed を造語したシェイクスピアの創造力、想像力は比類なく優れていると高く評価されるべきである。シェイクスピアは英語という言語の内的構造を把握した上で詩的直感を働かせて green-eyed を生み出した。スペンサーは、whally-eyes (the sign of gelysy) と書いているので、whally が「緑色」を意味し、「嫉妬」を含意することを知っていたと思われるが、スペンサーにはシェイクスピアに匹敵する創造力・想像力、語感はなかった。スペンサーは難解な学術語、外来語には造詣が深かったが、シェイクスピアに比べると感性に欠け、一般民衆の口語には疎かだったのである。

人文科学は、世界中の生物の中でも唯一想像力を働かせることのできる人間が過去何千年、何万年に渡って積み上げてきた先人の経験と知識を読み解き、人類の可能性を探求することを研究の対象とする。それだけに、重層的に蓄積された人文的遺産を読み解くには膨大で、幅広く、深い知識を必要とし、なによりもたくましく柔軟な想像力を必要とする。人文科学が古くなることはない。時代がどのように変わっても常に新しい読みを発見することができるからである。それが人文科学である。

人文科学と呼ばれる領域はあまりにも多岐であり、したがって、古典ギリシャの昔には試みられた、あらゆる分野に渡る統一した学問体系の構築はきわめて困難である。人文科学にとって必要なのは、人間だけが有する想像力、創造力である。人文科学的な知的活動には創造力と

36 一般民衆が無意識のうちにすでに使用していた語を取り上げたこと、green がゲルマンの時代から「嫉妬」を意味することをシェイクスピアが知っていたことはシェイクスピアのたぐいまれな才能と博学ぶりを証明している。このような例はシェイクスピアの英語の発音、文法、語にいくつもみられる。

想像力が不可欠である。同時に、文化、芸術、言語といった過去の人文的遺産を読み解くには、遺産を残した先人たちに劣らない創造力、想像力が必要とされることを銘記すべきである³⁷。

忘れてはならないことは、人間のみが有する言語という伝統、文化を形成するからくりを通して人類が今までに獲得した経験と叡智の全体像を俯瞰してさらにその上に創意に満ちた新しい伝統を積み上げることのできる思想家、芸術家、詩人がいつの時代にも存在しているということである。green-eyed という 1 語は、シェイクスピアがそういうたぐいまれな才能を持った稀有の詩人のひとりであることを実証している。

サピア (E. Sapir) は *Language: an Introduction to the Study of Speech* の開巻冒頭で次のように述べている。

(47) Knowledge of the wider relations of their science is essential to professional students of language if they are to be saved from a sterile and purely technical attitude.

(*Language*, 1921, rpt.1963, Preface)

(言語研究の専門家は、無味乾燥な、ひたすら専門的な見方しかできない態度から救われたいならば、言語が自分の想定している以上に他分野との関わりを広く持っていることを知ることが不可欠である³⁸。)

(注：本稿では「語形成 (法)」と「造語 (法)」とを意味上の区別をしていない。)

引用文献

Aesop's Fables, 2008, IBC パブリッシング。

Bradley, H. *The Making of English*, 1904, Macmillan.

E.C. ブルーワー著『ブルーワー英語故事成語大辞典』1994, 大修館書店。

Encyclopædia Britannica; or a Dictionary of Arts and Sciences, 1771, S. Bell and C. MacFarquhar.

ゴールドスミス, O. 『動物誌』1774, 玉井東助編訳, 1994, 原書房。

Havelok, ed. by G.V. Smithers, 1987, Oxford Clarendon Pr.

Johnson, S. *A Dictionary of the English Language*, 1755, rpt. 1990, Longman.

Murray, J.A.M. et al (eds.), 1884-1928; *OED*², 2009, on CD ROM Version 4.0, OUP.

Northall, G.F. *A Glossary of Words and Phrases Used in S.E. Worcestershire*, <http://archive.org/stream/glossaryofwordsp30sailuoft/...>

Nares, R. *A GLOSSARY; OR, COLLECTION OF WORDS, PHRASES, NAMES, AND ALLUIONS TO CUSTOMS, PROVERBS, ETC.* (...) 1822, Robert Triphook.

Onions, C.T. *A Shakespeare Glossary*, 1911, rev. by R.D. Eagleton, 1986², Oxford Clarendon Press.

Sapir, E. *Language*, 1921, rpt.1963, Hart-Davis.

37 有馬道子『日英語と文化の記号論』pp.76-7。

38 サピアが北米先住民の口語言語を研究した経験から、印欧比較言語学者たちが文字で書き残された歴史文献だけをたよりに研究していたことを批判して述べたものである。

- Schmidt, A. *Shakespeare Lexicon*, 1874, rev. 1902, rpt. Dover, 1971.
- Shakespeare, W. *The Merchant of Venice, Othello, The Rape of Lucrece, Love's Labour's Lost, Twelfth Night, Romeo and Juliet, Titus Andronicus, King John*; The Arden Shakespeare, The Riverside Shakespeare, 「研究社詳註シェイクスピア叢書」, 「大修館シェイクスピア叢書」。
- Skeat, W.W. *An Etymological Dictionary. of the English Language*, 1910⁴, rpt.1978. Oxford Clarendon Press.
- Spenser, E. *The Faerie Qveene*, 1590 (BK. I ~ III), 1596; 細江注釈版 (研究社英文学叢書), 1929; 和田勇・福田昇八訳『妖精の女王』1994, 筑摩書房。
- Webster, N. *An American Dictionary of the English Language*¹, 1828, rpt., 1970, Johnson.
- 赤祖父哲二編『英語イメージ辞典』1986, 大修館書店。
- 有馬道子『パースの記号論』2001, 岩波書店。
- 有馬道子『日英語と文化の記号論』2015, 開拓社。
- 稲木昭子・沖田知子『アリスのことば学』2015, 大阪大学出版会。
- 井上義昌編『英米風物資料辞典』1971, 開拓社。
- 遠藤敏雄『英文学に現れた色彩』1971, プレス東京。
- 中玉利光星, 「green に対する考察」2011, unpublished.
- 三輪伸春『英語の語彙史』1995, 南雲堂。
- 三輪伸春『ソーシャルとサビアの言語思想』2014, 開拓社。
- 三輪伸春「auburn: シェイクスピアの色彩語」2015, 『地域政策科学研究』(鹿児島大学大学院 博士後期課程地域政策科学専攻, 第12号)。
- 『ジーニアス英和大辞典』2001, 大修館書店。
- 『研究社新英和大辞典』2002, 研究社 (筆者, 語源欄執筆)。

原稿受領日：平成27年10月2日；Received 2 October 2015

掲載受理日：平成27年11月9日；Accepted 9 November 2015